

説教余滴 2018年7月15日、土砂災害

早いものです。もう7月半ば。梅雨も明けました。

ずいぶん早い梅雨明け宣言。その後、梅雨の戻りのような数日もありました。

そして西日本の豪雨災害。昨年も遭ったことですから、例年通りの大雨と土砂災害と言いたくなります。これは歓迎できることでないので、「例年」とは言いたくありません。

防災の対策が必要、なんて言うまでもないことです。

映像を拝見すると、山の南側斜面を削り、きれいなひな壇のように造成した様子が見受けられます。新しい立派な家屋が土砂・流木に押しつぶされ、押し流され、見る影もありません。ここで家庭を形成し、子供を育て、立派な社会人となろうと考え、胸を篤くしていた人々の夢の跡になってしまいました。この所に再建が可能なのでしょうか。破壊された住宅、流失・破損した家財、失われた人命と共に思い出も、還ってはきません。悲しいことです。

「最初は緊張が続きました。今は、疲れを感じています。先行きが判らないので、何も手をつけられません」と、40歳ぐらいの被災者男性。

自暴自棄の感じはないし、絶望の気配も見えませんでした。いつも感じることですが、被災した方たちの強さ、粘りがすごい、と言うことです。試練に耐え、乗り越える力を持っている人ばかりのはずはありません。泣きたい、嘆きたい、訴えたい、しかしそうしたら解放されるのかと考えると、歯を食いしばって耐えるしかない、と考えているのではないのでしょうか。

金曜日、ポストに教団社会委員会からの葉書が入っていました。

「記録的豪雨により、多くの犠牲者、被災者が出ています。教団では特に、東中国・西中国・四国各教区から被害が報告されています。直ちに募金を開始いたします。」

次聖日から私たちもこの活動に参加したい、と願っています。